シンポジウム

生協の「経営危機」を
どうとらえたのか、どう語られたのか

第 21 回総会記念シンポジウムは生協の事業に着目し、現代の生協がおかれている状況を「経営の危機」ととらえ、生協の強みを考え、どう活かしていくのかという課題をテーマに開催しました。

このテーマへの関心は高く、これまでの総会記念シンポジウムのなかでも最大の参加者を迎え開催することになりました。特に、役職員の参加が多いのが特徴でした。

総会記念シンポジウムの内容は、これまで『総会記念シンポジウム報告集』として発行してきましたが、本号より『くらしと協同』の増刊号として発刊することにしました。

本号は総会記念シンポジウムの内容を従来のように忠実に再現することに主眼をおいたものではなく、その内容をベースにしながらも、シンポジウムの狙いやその後の論議などを参考に、報告者と分科会コーディネータそれぞれの責任においてまとめたものです。

そのねらいは、総会記念シンポジウムの到達とその成果をコンパクトにまとめ、読者のみなさんに少しでもわかりやすく伝え、現場実践に役立てていただくことです。

一日目は、研究所の 20 年をふりかえり、そのなかで生協の「経営危機」がどう語られてきたのか、本研究所の浜岡政好氏が基調報告をおこないました。シンポジウムは、鈴木勉氏のコーディネートで研究者より豊福裕二氏、庄司俊作氏、生協の実践家としてコープあいちの夏目有人氏、パルコープの池晶平氏より報告がなされました。4 人の報告を受けて、二場邦彦氏がコメントをおこないましたが、当日は時間の制約もあったことから生協の今後の課題にもふれた内容を付記しています。